

2014年4月13日 棕櫚の主日礼拝

説教 新しい人間関係

ヨハネの福音書19章23-30節

【主イエスの愛する弟子ヨハネ】

「主イエスの愛する弟子」。これはヨハネ自身のこと。「自分で自分のことを書き残す」などということは、なんだかあつかましいように思えます。しかも「主イエスの愛する弟子」と自分で言うなんて、と思わないでもありません。けれどもヨハネは、主イエスの愛を、伝えようとしました。自分を愛してくださった主イエスの愛。その愛は、自分の書いた福音書を手に取るすべての人に向けられていることを伝えようとしたのでした。

【愛の絆】

「女の方。そこに、あなたの息子がいます」(26)と「そこに、あなたの母がいます」(27)は十字架の七言のうちの第三言。考えてみれば、主イエスは十字架に架けられて、七つの言葉しかお語りになれなかった。苦しい息の中、七つの言葉しかお語りになることができなかった。だから、その一言一言は、どうしても伝えたいと願われた大切な言葉。そして第三言は、私たちを愛の絆で結びつけ、神の家族を作り出す言葉でした。

【エリザベス・サンダース・ホーム】

混血孤児の施設エリザベス・サンダース・ホームの創立者は沢田美喜という熱心なク

リスチャン。けれども「これはあなたの母」という本に描かれた彼女は、決して聖女ではありません。ひどい体罰、えこひいき。けれども、美喜は激情に駆られて自分をもてあますと、礼拝堂に駆け込んで祈りました。子どもたちに「祈るときには、両手を固く握り合わせて、痛くなるほど握り合わせて祈るんだよ」そう教えた美喜自身もそのように祈ったでしょう。「そこに、あなたの母がいます」と、主イエスが子どもたちに自分を母として与えたことを、思い出しながら。そして彼女は、30年間彼らの母であり続けました。主イエスは新しい人間関係を造り出すことができるのです。

【十字架に架けられた神】

ルターは「主イエスは十字架につけられた神だ」と言いました。人類と一体になって、神が死んだと言ったのです。どう考えても、神さまが死ぬことなどあり得ません。けれども、私たちの考えをはるかに超えて、神が、私たちと一体となって、死んでくださった。それは、私たちが、滅びることを、痛んでくださったからでした。神である主イエスは、私たちが滅びるよりは、ご自分の死を選んでくださったのでした。

【神の家族】

そして、主イエスは私たちがただ滅びないだけではなく、新しい家族、教会という神の

家族を誕生させてくださいました。マルコの福音書に「そして、自分の回りにすわっている人たちを見回して言われた。『ご覧なさい。わたしの母、わたしの兄弟たちです。神のみこころを行う人はだれでも、わたしの兄弟、姉妹、また母なのです』」(3:34-35)とあります。「神の家族」とは、神のみこころを行う人々の交わりなのです。

【解決ではなく和解】

神のみこころを行うとは何をすることか。私たちは、しばしば、それは伝道をするのだとか、礼拝を守るのだ、と考えがちです。けれども、主イエスが十字架の第三言で、おっしゃったのは、何かをしなさい、ということではありませんでした。そうではなくて、「これはあなたの息子」「これはあなたの母」、あなたがたは、もうすでに新しい人間関係の中にいるのだとおっしゃったのです。

新しい人間関係でたいせつなことは、関係そのものです。問題を解決することよりも、たがいの関係が損ねられたなら、それを回復することをもっとも大切なことだと考えるのです。そのように、和解に焦点を合わせるなら、今ある問題はそれほど重要ではなくなります。それどころか多くの場合、問題にならなくなるのです。しばしば問題の解決に熱中して、和解を忘れてしまう私たちは、十字架上の第三言を心に刻みたいと思います。